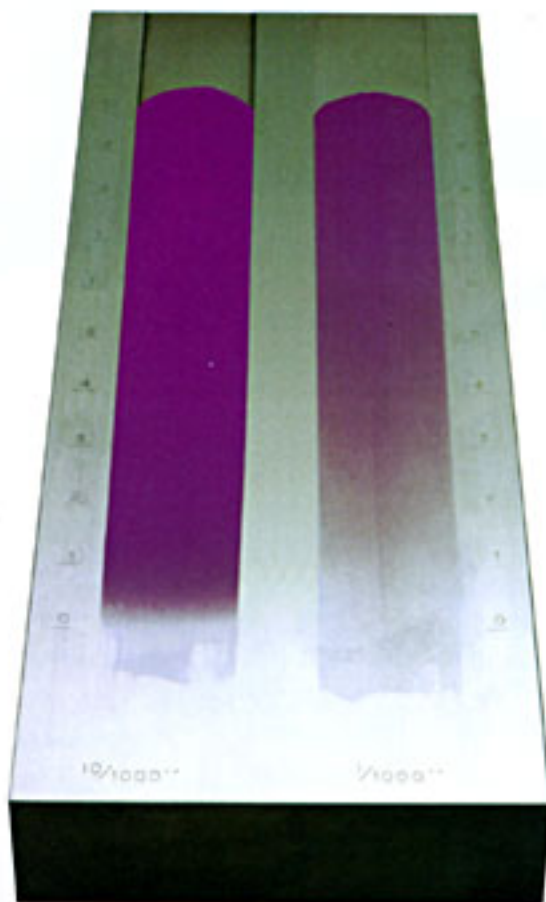


あたりまえのように同じ色だけど。



ホルベインでは油絵具を製造する前に6工程の顔料テストを行い、顔料の品質管理を徹底します。例えば絵具の濃らかさを左右する顔料の「粒度」を計るにはグラインドゲージという機具を用います。ゲージに絵具状にした顔料をのせ、金属製スクレーパーで延ばして掻き取ります。その際にスジ状の跡が出たら、出始める位置によって粒子の粗さを測ります。絵具は精密製品。細かなテストの一つ一つが性能を守ります。ホルベインの命は品質です。

● 20号チューブ(110 ml)、全40色で新登場。大きいサイズだけど、品質は変わりません。

ホルベイン工業株式会社 東京都品川区東品川2-10-4 TEL.03-3562-9211 大阪府東大阪市1-5-28 TEL.06-8722-1114



holbein

ホルベイン絵具

www.holbein-works.co.jp

holbein

渡辺好明

生成と消尽のときの結び目に

鷹見明彦 文 森田ケン 写真*印



1985年11月、ドイツ・デュッセルドルフ美術アカデミーの工房にて。東京藝大の壁画研究室で助手を務めた後、DAAD(ドイツ学術交流会)の奨学生として留学。樹脂に油彩の点描を封じ込めて、スタンドグラス風の作品(次ページ上)を制作した



1980

「一定の行為の集積が、空間へも広がっていく。フレスコの習得によって、技法的にも制作に必然性を持ち込みたかったのです」

自現(部分) 1980
パネルにフレスコ(漆喰、顔料) 180×1600cm(10枚組)

青山霊園近くの通りをはいった住宅地の一画、坂道の際の傾斜地にそって建つ白い函型のビルの内部で、灯火は燃えていた。大きなウインドウを側壁で囲った空間の床には、ガラスが敷かれ、その鏡の間の宙に、中心で交差した3つの輪が浮いている。ワイヤーで吊られた金属製の輪の上に燭台のように並ぶろうそくに、焰が灯されている。夏の終わりの昏れ方の縁で、火が音もなく輪を消尽させていく……。

幾何学形に並んだろうそくを燃焼させる作品を展開する渡辺好明は、本来は、東京藝大で壁画を学び、学生時代にはフレスコ技法に基づく作品を制作して、壁画研究室の後継者の「トースを歩んでいた」。

「学生のころは、自己表現と普遍性とのあいだで、どのように表現を成立させていくか、考え模索していました。1年のときに受講した三木成夫先生の生物学の講義に影響を受けて、りんごの種子の発芽から成長する過程を毎日1枚ずつ、1



時の刻印 1986 アクリル・ガラスにポリエステル樹脂、油彩 350x500cm
デュッセルドルフ美術アカデミーでの展示風景

1986 「部分と全体とが有機的に関連しながら、自己増殖していくフラクタル構造を見せています。ドイツでは、環境や場所に関わる作品を多く制作しました」

年近くドローイングしました」。

1970年代の半ばは、ジャクソン・ポロックの絵画と行為への関心は、李禹煥の『出会いを求めて』とその点線による作品やミマリズム、シユポール・シルヴァスなどにも拡がっていったが、モダニズムとその後表現には、行きつまりも感じていた。

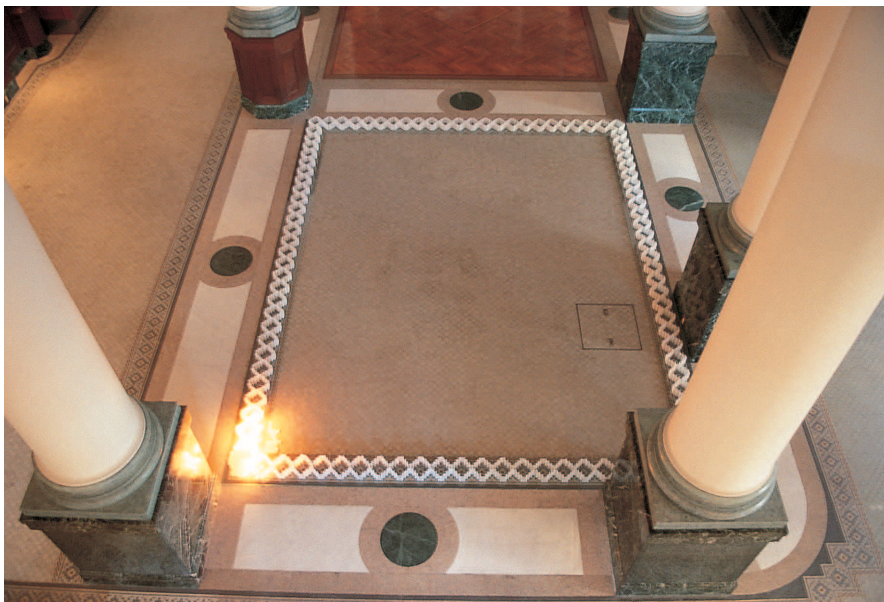
「大学院で壁画研究室に進んだのは、現代美術の主流からは距離を置きたかったのと、作品の自立性といった原理に自閉したモダニズムのあり方に対して、閉じた平面ではなく、一定の行為の集積が建築空間へも拡がっていくフレスコの習得によって、技法的にも、制作に必然性を持ち込みたかったです」。

『《自現》(1980)は、フレスコのジョルネティグを単位に1パネルを6日分に分割して、ハツチング(線描)の筆跡を連鎖させた初期作。銀座のギャラリーでの初個展で、10枚のパネルをつないで空間を囲む壁画のように展示した。



光ではかられた時—階梯— 1991 パラフィンワックス、灯芯
「白州・夏・フェスティバル 91」山梨県白州町 撮影=黒川末来夫

壁画研究室の助手を務めた後、85年から、ドイツ学術交流会(DAAD)の奨学生としてデュッセルドルフ美術アカデミーに留学。クリスチアン・メゲルトの造形美術と建築の統合「クラス」に在籍した。メゲルトは、50年代から60年代に活躍したグループ「ゼロ」のメンバーの一人で、光と鏡を使った環境的な作品で知られる。ドイツに留学したのは、奨学金が他にくらべてよかつたという



上下 光ではかられた時—オーナメント 2002
ろうそく、ガラス 旧川崎銀行千葉支店
「THE ESSENTIAL」展(千葉市美術館)での展示より

2002

「ろうそくの^{ほのお}焰は、時間とその流れのなかでの人間の存在と営みを観想させます。人間の思考の原型への問いかけが、うながせばと」

事情もありましたが、予備校のころから愛読していたヘルダーリンやその後読みはじめた「チエ、ハイデガー」といったドイツ系の思想に惹かれていたからでもあったと思います。」
《時の刻印》(1986)は、アクリル・ガラスの上に透明樹脂を流して、その内部に油彩の点描ドローイングを封じ込めた作品。学内展でデュッセルドルフ美術アカデミー内の窓にスタンドグラスのように設置した。「部分と全体とが有機的に関連しながら自己増殖していくフラクタル構造を見せています。」
「この作品もそうですが、ドイツでは、環境や場所、建築と関わる作品を多くつくりました。公園の斜面を掘り起こして、地層を露出させ、その土で築いたヒラミッドの崩壊過程を見せる作品や砂岩ブロックに顔料入りのコンクリートを詰めて積層したモニュメントなども制作しました。」
89年に帰国して、母校にもどつた。

わたなべ・よしあき 1955年兵庫県生まれ。80年東京藝術大学美術学部油画専攻卒業。82年同大学院壁画研究室修了。DAAD(ドイツ学術交流会)奨学生としてデュッセルドルフ美術アカデミーに留学。89年修了、帰国。東京藝術大学壁画研究室講師を経て、現在同大先端芸術表現科助教授。

おもな個展に80年Gアートギャラリー(東京)84年ときわ画廊(東京)92年横浜ペリー二の丘ギャラリー(神奈川県)92,96年ギャラリー美遊(東京)94年クルト・ギャラリー(ウィーン、オーストリア)97年ガレリ・ソル(東京)99年齋藤記念川口現代美術館(埼玉)2000年巷虎(東京)02年スピカ・ミュージアム(東京)など。

おもなグループ展は、87年「ドイツ庭園博覧会」(デュッセルドルフ、ドイツ)91年「白州・夏・フェスティバル 91」(山梨)95年「桐生再演」(栃木)96年「Implicate Order」(ギャラリー美遊、東京)「美の内と外」(板橋区立美術館、東京)97年「光をつかむ」(O美術館、東京)99年「JAPANDORF」(クントミュージアム、トゥン、スイス)2002年「THE ESSENTIAL」(千葉市美術館)03年「SYNAPHAI」(連系「MUSÉE F+」表参道画廊)など。



南青山・SPICA artでの個展「光ではかられた時—ポロメオの結び目—」(2004年9月4日～18日)の会場にて。「ポロメオの輪」の形に並べて吊つたるうそくに、毎ター一定時間、点火して、会期中に燃焼させる。三つの輪が交差したこの形の名前は、イタリア・ルネサンスのポロメオ家の紋章に由来する[*]

《光ではかられた時 階梯》(1991)は、灯芯を入れて成形したパラフィンワックスのブロックを段丘状の地形の内部から階段型に積み上げて、燃焼させた作品。山梨県白州町のアート・フェスティバルで発表した。

「パラフィンで成形した作品は、ドイツでもつくりましたが、うそくを燃やす作品は帰国してからです。教会やクリスマスに限らず、ヨーロッパの生活で身近にあったその焰と灯りは、時間やその流れのなかでの人間の営みを観想させました」。

《光ではかられた時 オーナメント》(2002)は、千葉市美術館に隣接する旧銀行の洋風建築を保存したホール内で発表された。列柱に囲まれた床面2か所のモザイクの装飾的紋様に合わせて、ガラス板上にろうそくを配置。同美術館での「THE ESSENTIAL」展企画・半田滋男の会期中、2か月にわたって連日定期的に燃やされた。

青山のギャラリーでの新作《光で

はかられた時 ポロメオの結び目》(2004)は、フィボナッチ数列による対数らせんや薔薇形、フラトン立体やピタゴラスの定理など、基本的な幾何形体や数列によるシリーズの一作。床や壁面に展開されてきたこれまでの作品から、位相幾何形にふさわしい宙づりが試みられた。ポロメオの輪とガラスの鏡面の投影は、ラカンがセミネールで用いた三界を連想させる。

「幾何形体は、それ自体には大きさや時間のないかたちですが、人間がそれに意味を与えてきた歴史があります。燃焼をとおして、アイデアの世界に完結しえない宇宙の在り方が顕れてきます」。

カオスに秩序を与える形体や生成の法則に対して、燃焼という消尽のダイナミズムを企てる渡辺好明の焰には、輪転する宇宙の瞬間に行為する人間の影が寄り添っている。

9月10日、東京・南青山のスピカ・アート個展会場にて取材

たかみ・あきひ「美術評論家」